

◆◇◆後半開始◆◇◆

■後期後半スタート。

朝の校門。久しぶりの子どもたち。手には夏休みの作品や本など、たくさんの荷物。あれっ、こんなに大きかったかな、と感じる子もたくさん。挨拶をしているとなんだか体の奥から力が湧いてくるよう。やっぱり子どもたちは私たち教師の元気の源、です。

■1時間目は校内テレビ放送。

5年生3人の子どもが代表して「志」を。そのあと生徒指導の酒井先生から感染症対策、特に感染への不安、恐怖から生まれる差別をしないことについて話をさせていただきました。



■私からは「志」をつくるにあたって次のような「思い出話」をしました。

私は大学生のころ、クラブ活動で空手をしていました。
4年生になって全国大会がありました。その試合は団体戦、五人対五人の勝負です。一回戦を勝って次の二回戦。相手は優勝候補のチームでした。
試合が始まりました。
勝負は二対二。最後の一人が勝った方が勝ちというところで五人目の私にまわってきました。とても緊張、そして怖くなりました。相手は見上げるような大男。勝てるわけがない。でも、後輩たちががんばってここまでつないでくれた。やるしかない。
私は覚悟をきめて飛び込んでいきました。相手もあせっていたのでしょうか、相手の拳が私の顔面に強く当たりました。私は吹っ飛びました。
倒れたとき。私はこんなふうに思っていました。
「しめた。顔面に当てるのは反則。相手はきっと反則負けをとられる。勝ったぞ。」
その時です。「立て！」監督の声でした。
私はビクッとなって立ち上がりました。審判がやってきました。
「大丈夫か?」「大丈夫です。」試合が再開されました。私はすぐに負けました。
そしてチームの負けも決まりました。
試合が終わってトイレに行きました。マウスピースを外すと前歯が四本折れていました。
私はうつむきながらみんなのところに戻りました。
痛かったけど、それよりも、自分のせいで負けてしまったこと、そして何より、倒れたとき、一瞬でも「これで勝った」と思ったことが恥ずかしい、かっこ悪いと感じていたからです。
でも監督は、「廣渡、あそこでよく立った。これまで試合で、今日が一番よかったぞ」と言ってくださいました。今、私の四本の前歯はつくりものですが、これは私の勲章です。

■この思い出話のあと文字職人、杉浦誠司さんの「志」をみせて、志は「かくご」からできていること。覚悟とは迷わない、強い心。自分のため、仲間のためにやるぞ、という心。そこから生まれるのが志だということを話しました。
前期後半、つくった志をもとに動き出す子どもたちの心に大切な勲章、宝物ができるよう、職員一同精一杯関わっていきます。

